

# 終わりの花

—艦隊これくしょん二次創作小説—

皆月蒼葉



本書は「艦隊これくしょん／艦これ」の設定に基づいたフィクションです。「艦これ」原作や実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません。また、特定の集団への差別的な表現・主張を行う意図はいっさいありません。



## 目次

序章	カブトビールとハイビスカス	七
第一章	1 + 1 + 3 + 2	四
第二章	夏の山猫	一三
第三章	幕間	一八
第四章	横須賀事件	一八七
終章	それから	二六一
あとがき		二七六



序章  
カブトビールとハイビスカス

みゆう、みゆうという海鳥の声に囲まれて、沼坂ぬまさか一はじめは甲板の上で目を覚ました。顔に被さった改造文庫のチェーホフをどけると、初夏の猛烈な日差しが直に瞳へと飛び込んでくる。狼狽し、目を細めながら軽くうめき声をあげると、長髪の少女が沼坂の顔をのぞき込んできた。端然な顔立ちではあるが幼さも感じさせる少女は、年の頃は十二、三といったところか。ぴしりと折り目のついた半袖のワイシャツに濃灰色の吊りスカート、腕には手首までの黒いアームカバーをつけている。沼坂の起床を確認すると、少女は小さく微笑んでから姿勢を正し、淀みない動作で敬礼をした。

「おはようございます、沼坂少将」

さて、この少女は……と考えて、その背中にあるものを見て納得した。およそいたいけな少女の背には似つかわしくない、鈍色の大型機械。無骨なのみならず、その端々からは砲身が伸びている。少女の背にあるものは、紛れもない兵器だ。

「……艦娘か」

言いながら、右の掌で目元を覆い、ため息交じりに起き上がる。



「はい！ 舞鶴鎮守府主計部所属、少尉相当艦娘、朝潮あさしほです！」

敬礼を崩さず答える朝潮に、沼坂は右手を軽く振って「休め」を促す。

艦娘——八年前から皇国海軍に導入された部隊だ。成年前の少女を武装させ、沿岸部の警備をさせる。少女たちは艦船には乗らない。艦装ぎざうと呼ばれる背中の機械が垂直に噴射する空気のおかげで、艦娘自身が水に浮くのだ。ホバー船と原理は同じだ。

敬礼を解いてもなお緊張をまとった朝潮に苦笑いしながら、二言三言会話を交わす。そのうち、沼坂の起床に気付いた同僚が笑いながら声をかけた。

「よお、お目覚めかい」

「カモメがあまりにうるさくてな」

時刻を確かめようと、短髪をかきむしりながら懐から機械手帳を取り出した。茶色の本草カバーをまとった文庫本サイズの機械手帳は、モノクロームフィルム・物理ダイアル方式の前世代品だ。最下部には小さく「東通とうつう五」の刻印がなされている。本体上部にあしらわれた小さな黒い補助ディスプレイには、現在時刻が光学センサーで表示されている。午後3時58分。見れば太陽は既に沈み始め、斜めから波間にぶつかっては乱反射する日の光も熾烈を極める。

「カモメがうるさいってことは、つまり陸地が近いってことだ」

ほら、とばかりに同僚があごで指した先には、緑で覆われた小さな島。左右に小高い丘を配し、中央には集落も見える。

「樺森さんよ、半日もかかるなんて聞いてないぞ」

沼坂があくびをしながら愚痴をこぼすと、聞いてなかったからだろ、と返される。

丹那島<sup>たんなん</sup>。皇都の南方300キロに位置する小さな火山島で、北東にフェリー港と軍港を有する。沼坂が目指すはその軍港、丹那要港部だ。

「ともあれ、沼坂閣下もとうとう地方左遷とはね」

「うるせえ、こういうのもちったアあった方がそれらしいんだよ」

樺森は純白の軍服に身を包み、肩には黒で縁取られた金色のワツペン、首元側に桜が二輪添えられている。気心の知れた同僚に対する悪童めいた笑みをたたえてはいるものの、切れ長の双眸に骨張った顔立ち、額と口元に刻まれた深い皺は、その上にある硬い軍帽のつばとも相まって敵めしさと頑徹さを感じさせる。いかにも皇国軍人然とした樺森に対して、沼坂はといえど白髪交じりの頭髪はぼさぼさのまま、覇気のない寝ぼけ眼に口元には無精髭、しわだらけの紫シャツによれよれの背広といったいでたちで、対比的と言うのすらためらわれるほどだ。

「で、この子が秘書艦か？」

親指で朝潮を指しながら、沼坂が問いかける。艦娘は沿岸警備のための存在とはいえ、実態としては陸上で事務仕事をしている時間の方が圧倒的に長い。主計部の朝潮のように、様々な部署に分かれてそれぞれの仕事をするが、中には基地長官の秘書として活動する艦娘もいる。それが秘書艦だ。

「いや、秘書艦は別にいる。舞鎮で留守番中だ。これがまた優秀な奴でな、俺とそいつの両方がいなくなったら鎮守府が回らないだろ」

「それもそうだ」

「ま、こいつも負けず劣らず優秀なんだがな」

言いながら樺森は朝潮の頭に軽く手を置いた。朝潮は小さくうつむき、顔を赤らめる。

「まあ、これでお前も曲がりなりに基地長官、晴れて秘書艦持ちになるわけだ。仕事の効率にも大きく関わるからな、心して選べよ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

沼坂は大きなあくびをしながら、気の抜けた声で答えてみせた。首を回すと、遮るもののない大海原が無辺の広がりを見せている。際だった波もなく、太平洋の名の通りに穏やかさで満ちている。

「にしても、こんな静かな海で戦争やってるとは、にわかには信じられないよなあ」

独りごちるように沼坂がこぼすと、樺森はわずかに表情を曇らせながら頷く。深海棲艦戦

——皇国が目下注力している戦争だ。戦争といっても、交戦相手は国家ではない。敵は深海棲艦という謎の勢力だ。艦娘と同じく、単身に艦装を背負った集団であるということ、皇国の近海でのみ存在が確認されていること、艦娘に敵意を抱き攻撃してくること以外は、何も分かっていない。深海棲艦の正体については、南方を根拠地とした左翼テロリスト集団、どこかの国

の開発した人型戦闘兵器、大国の支援を秘密裏に得た海洋民族など種々多様な説があるが、どれも憶測の域を出ない。深海棲艦が人間であるかすら疑わしいのだ。出自も背景も目的も分からない勢力を相手に、もう五年も泥沼の戦争を続けている。

そして、なおゆゆしい事態なのが、この戦争には艦娘を動員せざるを得ないこと。相手も人間サイズとあつては、艦船や航空機で攻撃するには的が小さすぎるのだ。もともと彼女たちの任務は沿岸警備、それも何か問題が発生すれば艦船を呼び出したうえで自らは待避できるといふ、きわめて安全なものだったはずなのに、いつの間にか年端もいかない身で命のやり取りをさせられている。沼坂は苦々しげな顔で、傍にたたずむ朝潮に目をやった。彼女の年齢からすると本来ならあり得ないような精悍な表情で、海に向こうを見据えている。高等小学校で趣味や芸能や色恋の話をしているような年相応の雰囲気は、もはや感じられなかった。

「朝潮っていったか」

つとめて優しい口調で声をかける。

「この戦争、お前は どう思う？」

朝潮は一瞬、意外そうに沼坂の顔を見上げるが、すぐに表情を取り戻し、毅然として答えた。「私は一兵卒であり、何かを意見できる立場にありません。ただ、国や仲間を守るために戦うのみです」

沼坂は言葉を継げず、口を真一文字に結んで息をついた。

「戦争といや」

欄干に右肘を乗せながら、樺森が口を開く。

「お前、まだ月島には顔を出してないのか」

沼坂の顔をのぞき込むようにして尋ねると、沼坂はしかめ面をして顔を背ける。

「今さら俺が行けた義理じゃないだろ」

「俺はそうは思わんがね」

樺森は右肘を軸に体をひねり、欄干に背を向けてもたれかかった。首をあげると空には海鳥の群れが見える。白い雲は風に吹かれ、ゆっくりと散り散りになっていく。首はそのままに目だけ動かして沼坂を見やるが、その表情は暗い。

「義理じゃないさ。……俺はもう、何十人と殺しちゃってるんだ」

言いながら、沼坂は朝潮に目を向けた。あどけなさの大きいに残る顔立ちを真摯正笏な態度で塗りつぶし、海を見つめている。その肅然とした表情に、沼坂は苦々しげに顔を潰す。

「そう背負い込むな。お前が殺したわけじゃないだろ」

「……いいや、俺さ。今の俺には、月島に行く資格なんてないよ」

海を遠目に眺めながら、沼坂が独りごちるように応えた。樺森はわずかに息をつき、軍帽のつばに手をやる。海風が吹き寄せ、船を小さく揺らした。

14 ノットでのんびりと水をかき分ける輸送艦はやがて島へと近づき、船速を落とす。丹那要

港の岸壁が見えてきた。船首から左右に割れていく水面には白い泡が立っては消え、そのたびに強い潮の香りを甲板まで放っている。潮の香りと照り返す日差しは、四方が水だらけであるにもかかわらず強烈な“乾き”を感じさせる。樺森と朝潮は微動だにせず港を見据え、沼坂は頭をかきながら息をつき、つばを飲み込む。やがて、輸送艦は船速を更に落とし——着岸した。艦に内蔵されたタラップが伸び、岸壁へと道を繋ぐ。沼坂は一度大きく伸びをすると、やらトラソックスに腕を伸ばした。

「いいのか、艦上ならまだしも、降りちまったらそこは基地だぞ」

袖すら通さず、肩に掛かっただけの軍服を見かねてか、樺森がとがめがちに声をかける。本来であれば沼坂のような服装で軍事基地に足を踏み入れるなど、絶対にあってはならないことだ。だが、沼坂は意にも介さない。

「少なくともここには俺以上の階級なんざいやしないさ」

「それはそうだが……下の者にも示しがつかんだろ」

樺森がちらりと朝潮に目を落としながら言うが、沼坂はにかつと笑うばかり。

「示しなんざつけたことねえよ」

樺森もまた呆れたように笑みを浮かべると、軍帽のつばに手をかけ、だろうな、と小さくつぶやいた。そんな様子を見てか見ずにか聞いてか聞かずか、沼坂は前を向いたまま右手を挙げてひらひらさせ、タラップを降りていく。カン、カンという金属質の足音があたりに響き、や

がて、止んだ。

しばらくあつて、艦は汽笛を鳴らし、岸壁を離れた。甲板に二人の姿はなく、沼坂も振り返ることはない。沼坂はただ一度大きくあくびをして、数秒うつむいてから、頬を両手で叩く。

「ま、なるしかないだろ！」

眼前に横たわる要港部の建造物群を眺めながら、にやりと笑みを浮かべた。

「さてと……にしても、誰もいないなあ……」

あたりを見回してみるものの、岸壁には艦娘はおろか工員の姿すら見えない。ただただがらんとしたコンクリートの足場が広がるだけだ。いくら僻地とはいえ、現役の要港としてはいささか信じがたい光景が広がっている。活気という面からもそうだが、それ以上に防衛という面からしてあり得ない。

「ま、建物の中にいるんだろ」

裏側に「専賣局」と大書きされた、よれた鶯色のパッケージから紙巻き煙草を一本取り出し、マッチで火をつける。辛みの強い煙が口腔と脳をじんわり満たしていく。たつぷり十秒はかけて一口味わってから、沼坂はゆっくりと歩き始めた。

鉄筋コンクリート造り二階建ての本庁舎にはやはり岸壁同様に人影がなく、港務部、経理部、軍需部などの部屋を覗いてみてももぬけの空だ。かといって埃と蜘蛛の巣にまみれているような惨状でもなく、生活感こそ一切感じられないものの、手入れはしっかりと行き届いている。

大理石調のリノリウム床を歩くうちに階段へとさしかかり、試しに手すりを人差し指でなぞる。これといった埃はつかない。

「少なくとも、人がいるつてのは確かなんだよなあ……」

とんでもないとこころに來ちまつた、と肩を落しながら、二階へと上がる。廊下には各部屋の扉上から突きだした室名札が見えるのみで、電灯すらついていない。

「二階にあるのは……工作部、通信室、会議室に……司令官室か」

右手に持ったトランクに目をやり、

「ま、先にこいつを司令官室とやらに置いてくか」

ため息交じりに独りごちた。司令官室は廊下の突き当たり、建物の一番奥に位置している。とはいえ官舎自体がそう大きなものではないため、大した距離はない。ドアの開け放たれた工作部を横切り、十数秒のうちに司令官室の扉へとたどり着いた。金のドアノブに手をかけ、回そうとした、次の瞬間だった。

「やあああああッ!!」

背後から女の叫び声が聞こえたかと思うと、

「痛っ——!?!」

沼坂の後頭部を激痛が襲った。

「がッ!?!」



振り向く間もなく、今度は右頬に衝撃が走り、その勢いのまま左肩から地面に倒れる。続きざまに五発、六発と、沼坂の胴に棒状の何かが振り落とされる。

「や、やめてくれ！」

懇願にもかかわらず打撃は続き、そのたびに沼坂は短くうめき声を上げる。

「分かった、降参する、降参するから!!」

必死の思いで両手を挙げると、やっと攻撃が止まった。息を切らしながら体を起こすと、目の前に箒の先端が鋭く飛び込んできた。

「恐れ多くも皇国海軍根拠地に忍び入るとは不届き千万！」

「……へ？」

驚いて箒の持ち主を見る。黒いストッキングに緑のプリーツスカート、黒地に白襟のセーラー服をまとい、長い銀色の髪を緑のリボンで後ろに束ねている。キツと沼坂をにらむ顔はしかし可憐さを感じさせ、華奢な体の後ろには――

「艦装……？ ひよっとして」

不安げな沼坂の表情とは対照的に、箒の持ち主はふっと勝ち誇ったような笑みを浮かべ、そして吠えた。

「いかにも！ 私は皇国海軍丹那要港部工作部所属、中尉相当艦娘——夕張ゆうばりよ！ で、貴方はいつたい誰なのかしら？ 死にたくなければ身分と名前を答えなさい!!」



沼坂は苦笑しながら右頬にガーゼを貼っている。

「本当に申し訳ありません！ 何とお詫びしてよいか……」

机の向こうでは、土下座でもせんばかりの勢いで夕張がひたすらに頭を下げている。先ほどまで「侵入者」を得意満面に叩きのめしていたとは思えないその様子は、見ていて痛々しいほどだ。沼坂も被害者でありながら申し訳なさそうに取りなそうとする。

「まあまあ、元はといえば、連絡もせず私服で乗り付けた俺が悪いんだから」

「で、でも」

今にも泣き出しそうな表情でなおも謝罪を続けようとする夕張にしびれを切らし、沼坂は右手で制止する。どうにも動くことができなくなり、沼坂の手のひらをじっと見つめたまま目に涙を浮かべて立ち尽くす夕張は、さながら「待て」をくらった子犬のようだ。ふう、と息を吐きながら革張りの椅子にもたれかかると、ギシリと背のきしむ音がした。

「実際」

沼坂が口を開く。夕張はびくりと体を震わせ、口を真一文字に結んで上官を直視する。その顔は申し訳なささく恐怖と不安のない交ぜになったような、怯えきったものだった。

「……あそこにしたのが俺じゃなく侵入者だったら、とんでもない事態になってたんだ。ここは曲がりなりにも皇軍の一基地だ。賊に入られたときの損害は計り知れないし、その排除は至上命令だ。危機管理の面からも、夕張の行動は間違っちゃいないさ」

沼坂の声は終始穏やかで優しく、夕張の覚悟していた叱責とは似ても似つかぬものだった。夕張は呆気にとられたようにしばらく彼を見つめていたが、やがてはにかみながら、ありがとうございますと涙声で答えた。その様子を見ながら沼坂は「バット」を一本、胸ポケットから取り出し、

「よし、このことはこれでおしまい」

と歯を見せて笑う。

「……それより、自己紹介がまだだったな」

フィルターもない安タバコに火をつけながら沼坂が言うと、夕張はあわてて口を開こうとした。が、それよりも早く沼坂が「じゃあ俺からな」と間延びした声を出し、吸い口に唇をつける。

「名前くらいはさつき言ったんだっけか。沼坂一。階級は少将だ。ここに着任するまでは横須賀の人事部長をやっていた。ま、典型的な事務畑だな。19で任官して五年ほどはさすがに実戦部隊にいたが、それっきりだ。ここ二十年はひたすら建物の中で書類とにらめっこ。現場のことがよく分からなくていろいろ苦勞をかけると思うが、補佐してくれると助かる。あとは……そうだな、趣味は仕事をさぼることと、上司に喧嘩を売ることかな。ま、そんなところだ」

タバコの白煙は執務室をたなびきながら上へと向かい、天井のファンによってゆっくりと攪拌される。携帯灰皿を取り出しゴールデンバットの灰を片付ける沼坂を見つめながら、夕張は

当惑の色を隠せないまま、

「あ……ありがとうございます」

と返した。

「おいおい、自己紹介されてありがとうはないだろ」

沼坂が笑うと、夕張は「いえ、そうじゃなくて……」と釈明しようとするものの、どうにも説明のしづらいことに気付いて口ごもる。彼にとつては今のが普通なのだ、説明したところで理解を得られるとは考えにくい。夕張は「あ、はい。えっと、私の番ですね」と片付け、自己紹介に入った。

「夕張です。艦種は軽巡洋艦、階級は中尉相当です。二年前に任官して以来、ずっとこの丹那に所属しています。お恥ずかしながら艦娘でありながら実戦経験がなくて、ずっと陸の上で兵装実験に明け暮れてました。趣味は……そうですね、機械いじりとデータ集めですかね」

慣れていないのであろうたどたどしい自己紹介を聞きながら、沼坂は笑顔で何度も頷く。夕張は頬を紅潮させながら何とか一通りしゃべりとおせると、軽く息を吸い込んでから「よろしくお願ひいたします！」と頭を下げた。その勢いが余りによかったもので、後ろに束ねた銀髪が弧を描いて額へと垂れ下がり、沼坂は思わず吹き出してしまふ。

「こちらこそよろしくな。うまくやれそうだ」

椅子から立ち上がり執務机に身を乗り出すと、右手を夕張へと差し出した。夕張は恥ずかし

そうに髪を戻すと、両手で握り返した。

「——さて」

再び椅子に身を任せた沼坂は、先ほどまでよりは幾分凜然とした表情になる。仕事の顔であり、少将としての沼坂の顔だ。右手を口元にやり、しばらく考え込むと、

「話が変わるが、この要港部についていくつか質問してもいいか？」

と切り出した。声色も先ほどまでと違い、若干の緊張をまとっている。夕張は短く、しかしはっきりと「はい」と応える。

「実はこの部屋に来るまでの間、しばらく要港部内を見学させてもらったんだが……工廠やドックがほとんど使われていないようだったが？」

「どちらもほぼ閉鎖状態ですね。工廠の方は私がたまに兵装実験で使うくらいです」

「なるほど……弾薬庫にもほとんど備蓄がなかったぞ」

「いやあ、零細基地ですのぞ」

とぼつが悪そうに夕張は笑う。沼坂は口元をゆがめ、苦笑いを浮かべながら右の腕で頬杖を突いた。

「だいたいで構わんが、具体的な各資材備蓄量を教えてくれるか？ 主要四資源のみでいい」と沼坂が尋ねると、夕張は口元に人差し指をやりながらこともなげに

「鉄鋼73単位、弾薬81単位、石油64単位、ボーキサイト41単位です」

と答える。沼坂は驚いた表情で、

「やけに精確な数字だな……それに、絶望的な数字だ」

どちらに反応してか、恐れ入ります、と夕張。沼坂は右手を頬からこめかみへと移動させ、渋い顔をしながら再び考え込む。一瞬、机に置かれた紙タバコへと目をやるが、すぐに目を戻し、やがて言葉を選ぶようにゆっくりと、

「……さつきからひどく嫌な予感がするんだが……ここに所属している艦娘とその他人員の数を教えてくれ」

これもだいたい構わん、と付け加えるのが先か、夕張が、

「司令官を含めて二人です」

と即答する。沼坂は軽いため息の後、目を覆った。

「……だとは思ったよ」

「ま、まあ司令官がいらっしゃったことで人数も倍になったわけですし！」

「頭痛がしてきた」

沼坂は安タバコを手にすると立ち上がり、窓辺まで足を運んだ。艦船のない岸壁はもの寂しく、ただ波が打ち寄せては返すだけだ。東向きの窓からは夕日を拝むことはできないが、もうかなり傾いていると見え、薄暗さが見て取れる。頭をかきながらゴールデンバットを口にくわえると、マッチを三、四回擦って火を起こす。炎の爆ぜる音と木の燃える香りが執務室に広が

った。沼坂はひどくゆっくりと煙を吸い、両切りのタバコは一度に三分の一ほども灰になる。

「とはいえ、さすがに一人だけというのもまずいよなあ」

白煙を吐き出しながら沼坂が言う。曲がりなりにも横須賀鎮守府隷下の後方統括機関だ。そこに在籍するのが軽巡洋艦一人というのでは確かに話にならない。とはいえ、

「あの資材量じゃなあ」

「艤装の新規建造は難しいでしょうね」

「となると任務で資材配給を増やすしかないわけだが……」

横須賀や呉といった大軍港から、丹那や單冠のような隷下基地、リングやトラックなどの海外駐留地に至るまで、資材は基本的に軍令部から通達される任務の達成状況によって配給量が定められる。輸送や警備といった後方支援任務もあれば、ほとんど実戦といえるものまで、任務の種類は多岐にわたる。ただし、どの任務にも共通していえることは、

「それも一人じゃどうにもならんしなあ」

吸い殻を携帯灰皿にしまいながら、ため息交じりに独りごちる。着任早々手詰まりを起こしたか、と顔をゆがめながら二本目に手をかけようとした、その時だった。

「……そうだ。うまい手がある」

言いながら沼坂は執務机に戻ると、やおら機械手帳を取り出しダイヤルを回す。小型三脚に固定し、側面の竜頭りゅうずを引っ張ると、文庫本ほどの大きさの半透明フィルムが出てきた。同時に、



機械手帳の底面にあるポインタからは赤い光が放たれ、執務机に縦横五マスの光学キーボードが出現する。

「こいつの扱いにもだいぶ慣れてきた」

夕張に向かっておどけて見せつつ、右手を使って軽快に光学キーボードを打鍵する。そのたび灰色のフィルムには9ポイントの築地ゴチックが表示されていく。やがてまとまりのある文章になると、沼坂の指は文字入力とは異なるキーストロークに移り変わった。先ほどまで入力していた文章が縮小し、紙飛行機のシンボルへと変化する。

「電信ですか？」

夕張の言葉に、沼坂はにやりと笑い、

「ああ。読んでみるか？」

## 二

夏至近くの南の孤島は日の沈みも遅く、六時を回ってもまだ太陽が顔を出している。沼坂と夕張は本庁舎を出ると、西の空に目をやった。真っ赤に色づいた落陽が丹那富士に阻まれながら、力なく島を照らしている。

「意外なもんだな、小さな島かと思ったが、こうやって見ると山のせいでもどこまでも陸が続いてるように見える」

「火山島なんですよ。西側の山は854メートル、東側は701メートルあります」

「そいつは大したもんだな」

言いながら、要港部を背に南へ歩き始める。数十秒もしないうちに、島をぐるりと一周する大通りへと出た。道は丁字路になっていて、先ほどまで二人が歩いていた小路の突き当たりには、モルタルで覆われた小さな崖が左右に広がっている。

「おいおい、なんだこの崖は。海岸と目と鼻の先だぞ」

夕張は笑って大通りを横切りながら、

「この島、こういう地形が多いんですよ。四千年ほど前に起きた溶岩の水蒸気爆発のせいだ、

小さい山があちこちにあるんです」

いくら小さいとはいえ、正面から見上げるとなかなかの威容だ。ちょうど隣に二階建ての家屋があるが、それよりやや高いくらいか。へえ、と感心しながら沼坂は崖を左に歩き始めた。

通りの両脇には花壇がしつらえられ、ヤシ科の樹木が等間隔に植わり、その間を真っ赤なハイビスカスが埋めている。見るだに南国を感じさせる光景だ。海岸沿いに歩いているはずなのだ。道は上り坂へとなっていく。それもけっこうな急斜面だ。

「そこを左です」

言われるがままに沼坂は十字路を左に曲がる。海岸から離れていくわけで、当然、

「おいおい、かなりの斜面だぞ……」

果てしなく続くようにも見える坂道を前に、思わず歩みを止めて悪態をついた。入隊時に修練を受けたとはいえ、数十年にわたる陸上勤務で沼坂の体はなまりきっている。

「そりや火山島なんですから。ほら、がんばってください、少将っ」

と夕張が笑う。駆け足気味に坂を登っていく夕張を追い、沼坂はげんなりとした表情で坂と向き合い始めた。

「この道が島のメインストリートなんですよ」

と言う割には、道の両側には石垣が延びるばかりで、店の一軒も見ることができない。沼坂は今にもつんのめりそうな体勢で坂を上りながら、

「本当に、こんな道沿いに、美味しい店なんかあるのか？」  
と軽口を叩く。

「心配しないでください。もうちょっと行けば平坦になりますから」  
「もうちょっととって、どれくらいだよ……」

しかし夕張の言うとおり、数分歩くと交差点へとさしかかり、そこから傾斜はうんと弱まった。それと同時に視界も開け、店もいくらか目につくようになる。

「この辺りが神湊かみなとという集落です。小さい島ですが、五つの村に分かれてるんですよ」  
「へえ、この面積をさらに五等分か」

傾斜が弱まり、心なしか沼坂の口調も明るくなる。

「ええ。今いる神湊村は島の北東部を占めてて、要港部もこの村に入りますね。要港部の南東にはフェリー港もあります。人口も一番多いんですよ。島の中心になってるのは、この道をしばらく行ったところにある千鳥村ちどりですね。支庁舎や漁港、安田銀行の出張所なんかがあります。海軍の飛行場があるのもこの村ですね。あと坂上、って島の南側のことなんですけど、そっちには峯ヶ郷みねがさと、藍ヶ江あいがえ、宮裏みやうらの三村があります。人口は三村合わせても千鳥村に届かないくらいで、あつでも温泉がたくさんあるんですよ。十二カ所もあるんです。温泉は坂上にしかないの  
で、ちよつとうらやましいですね。それと坂上は見晴らしも良くて——」

歩きながら楽しそうに島の紹介を続ける夕張を、沼坂は優しげな面持ちで見つめる。

「ずいぶん詳しいんだな」

「はい、そりやもう！ この島、大好きですから。何ならもっと詳しいデータもありますよ」  
データ。そういえば夕張は自己紹介で「データ集めが趣味」と言っていた。集めたデータとやらはどの程度のものなのだろうか。沼坂は少し考え、いたずらっぽい笑みを浮かべて問うた。  
「夕張のデータってのは、この島以外のことにも対応してるのか？」

夕張は一瞬きよとんとした顔をするが、すぐにその表情は誇らしげなものへと変わる。

「もっちりんです！ 夕張のデータベースは深いですよ。美味しいお店から軍の重要機密まで網羅しちゃってます！」

「おいおい、穏やかじゃないな。重要機密って、お前には閲覧権限なんてないはずだろ。いいのか、上官の前でそんな危なっかしいこと言って」

苦笑いを浮かべながら沼坂が言うが、夕張は意にも介さない。

「大丈夫ですよ。必ず司令のお役に立つデータですから。それに」

「……それに？」

聞き返す沼坂の顔をのぞき込み、夕張は満面の笑みを作って言う。

「司令が細かい規律なんか気にする方じゃないってのは、基地に私服でいらっしやったときから十分理解してますし」

沼坂は三秒ほど夕張の顔を見つめ、やがて、

「返す言葉もないな」

と笑った。

通りはだんだんと賑やかさを増していく。海岸の辺りには人影もほとんどなかったが、ここではすれ違う人の数も多い。いずれも夕張を見ると親しげに挨拶をし、夕張もそれに笑顔で返している。艦娘といえ、彼女も島の一住人に他ならない。

「あつ、ここですここ。この神社を左に行つたところですよ！」

ようやくたどり着いた料理屋はタイル貼りのモダンな建物で、入り口には「郷土料理・榮」の看板が掲げられている。内装は木材をふんだんに使つた民芸調だが、新しさも感じさせる。店主は夕張の顔を見ると「あら夕張ちゃん、いらつしやい」と声をかけた。

「ハルおばちゃん、紹介するね。この人が私の新しい上司さん」

「おやまあそうなのかい。夕張ちゃんがお世話になります。至らない子ですがどうぞお願いしますね」

まるで箱入りの娘を外にでも出すかのように、割烹着姿の店主は深々と頭を下げる。

「ずいぶん可愛がられてるんだな」

沼坂が夕張を小突くと、恐れ入ります、と夕張は決まり悪そうに、しかし嬉しそうに笑みを浮かべた。

二人が席に着くとほぼ同時に、店主が瓶とグラスを二本ずつ持つてくる。片方は黒いビール

瓶で、洒落た筆記体で「カプトビール」とラベルに記されている。もう片方は青みがかつたりボンシトロン。店主がその場でグラスに注いで、カプトを沼坂に、リボンシトロンを夕張に手渡した。

「なかなかいい店だな」

と沼坂がグラスを持ったまま店内を見渡す。やがてビールに目線を戻し、

「特にカプトとは洒落てる」

と付け加える。

「とりあえず乾杯でもするか」

「ですね。では司令の着任を祝しまして」

こつん、とグラスの当たる音が聞こえた。和製ドイツビールと銘打つだけあって、カプトの味はずっしり重く、風味も大変に芳しい。グラスの半分ほどを飲んでうなり声を上げるうち、小鉢に入った菜物が運ばれてきた。ごま和えであることは分かるが、沼坂には見たことのない菜物だ。口に入れてみると、独特の渋みが口の奥に広がる。すりごまの量がかなり多めだが、それがかえって菜物の味をまろやかにし、うまみを引き出している。

「この変わった菜っ葉はなんだ？」

「それはタンナゼリっていう野菜で、この島の名産なんですよ」

ふむ、と唸りながら二口目を放り込む。芽茶のような奥行きのある味わいが鮮烈で心地よい。

島野菜の味を楽しんでいるうちに、次の料理がやってくる。天ぷらだ。

「ずいぶんいろんな種類があるな。これは……なんだ？」

言いながら紅の差した薄い天ぷらを口に含むと、葉物のような薄さからは想像できないぬめりが現れ、舌を楽しませる。

「それ、ハイビスカスの天ぷらですよ」

「ハイビスカス!？」

驚く上官にしてやったりの面持ちで、夕張は続ける。

「ええ、ここに来るまでの道端に咲いてたあの赤いやつです。意外といけるでしょ？」

「ああ、花の天ぷらなんて初めて食ったが、悪くないな。こっちは？」

「それはトビウオの天ぷらです。そっちがさっきも食べたタンナゼリ。油によくあつて美味しいんですよ。それからこれが——」

夕張の解説に律儀に頷きながら、いずれも島名産の食材を口に含んでは目を丸くして喜ぶ。夕張は満足げに微笑みながら、トコブシの天ぷらに箸をつけた。

「そういえば、司令はこちらにいらっしやるまでは人事部長をされてたんですよ」

沼坂は一瞬夕張に目を向けるが、すぐに天ぷらへと興味を戻す。

「ああ。しかも悪名高い横須賀の人事部だからな。実戦部隊にいる方がまだ楽つてもんだ」

「どんなお仕事なんですか？」



「基本的には夕張が想像してる通りだよ。一般兵や下士官、工廠の連中や事務方なんかの管理、召集解雇が主だった仕事だ。実のところ、それだけならそこまで忙しくねえ」

言いながらタンナゼリの天ぷらを飲み込むと、赤ビールに口をつける。独特の渋みは油にも合うが、それ以上に酒にも合う。沼坂は小皿に箸を置き、続けた。

「だが、八年前から新しい業務が加わってな」

「八年前というところ……艦娘関係ですか？」

夕張の即答に、沼坂は肩をすくめて大げさに驚いてみせる。流石だな、とからかい口調で言いながら、胸ポケットから“バット”の紙パックの頭だけ出し、夕張の目を見る。夕張が右の手のひらを上にして無言で頷くと、沼坂は一本取り出して火をつけた。

「艦娘の登場が今から八年前。開発した技研の連中にしてみりや兵器って扱いはなんだろうが、どう考えたってお前ら人間だろ？ 普通の艦艇と同じように軍務局預かりにしてたんじゃいろいろと問題があつてな。それで艦娘だけは特別に各鎮守府の人事部が掌握するってことになったんだ。ま、外戦部隊の通常艦艇と違って、艦娘は鎮守府に属しての近海警備が役目なんだから、そっちの方が都合もいいしな。本来なら警備府や泊地の長官ごときがよそから艦船を都合つけたりなんてできっこないのに、艦娘ならそれができるのには、そういうカラクリがあるんだよ」

「それでそんなに忙しくなつたんですね」

「そりやそうよ。なにせ今までは新兵が入ってくる時期以外はさほど仕事もなかったのが、艦娘が出て来てからは出撃のたびに動かなきゃなんねえんだから。しかも深海棲艦と一番激しくやり合ってる横鎮の人事部だぜ。もうきりきり舞いだよ」

アルマイトの灰皿に灰を落としながら言う。店主が握り寿司の盛りられた下駄を持つてくると、沼坂はタバコの火を灰皿でもみ消した。灰の苦い香りが辺りを包む。

寿司種はタイやトビウオなどの白身魚ばかりで、どれも醤油だれにつけ込んである。夕張によれば、醤油に染まった寿司種の色から「コハク寿司」と言われているそうだ。夕張が箸を伸ばすと、沼坂も右手で一貫つまんで口に入れる。酢飯は本土の物よりかなり甘く、驚くことにわざびの代わりにからしが使われていた。

「ところで、お前さつき『軍の重要機密にも詳しい』って言ってたよな」

寿司を頬張りながら、鋭い目つきで沼坂が言う。

「各基地の出撃記録って、今から取り出せるか？」

「取り出すも何も」と夕張が笑う。「そのくらいならすべて覚えてますよ」

予想外の言葉に、沼坂は思わずむせてしまう。本当だとすれば、目の前にいる艦娘の能力ははかりしれない。

「出撃記録がどうかされたんですか？」

「いやなに、横須賀にいた頃にまとめて、ちょっと気になることがあつてな」

言った瞬間、夕張の顔から笑みが消える。沼坂の瞳をひたすらまっすぐに見据え、ややあつて口を開いた。

「……先制攻撃の成功率ですか？」

二貫目に手を伸ばそうとした手を降ろし、沼坂は目を見開いて、正面にいる怪物を見つめた。何が軍事機密にも詳しいだ。この女のデータベースはそれどころではない。こいつは、完全に気が付いている。恐怖から、そして快感から、沼坂は笑いがこみ上げてくるのを感じた。

「そう、新造艦だけはなぜか先制攻撃の確率が百パーセントに達してる。なぜだと思う？」

「……深海棲艦との最初の交戦は今から五年前」

夕張がとつとつと語り出した。沼坂は足を組み、背もたれに身を任せて続きを促す。

「横須賀鎮守府所属の水雷戦隊が近海警備中に深海棲艦を視認、再三にわたる停船命令を無視したため砲撃を行ったことから発生しました。その時の艦隊構成が」

「それなら俺も覚えてる。旗艦が軽巡笠置、麾下の駆逐艦が朝露、白妙、速鳥だ」  
夕張は頷き、さらに続ける。

「次の交戦がその二カ月後。速鳥の除籍により再編された、軽巡天龍、駆逐朝露、白妙、曙、潮からなる水雷戦隊が哨戒任務中に深海棲艦と遭遇」

「朝露の方だったか？」

「はい。深海棲艦が朝露に砲撃して開戦しています」

沼坂は天を仰ぎ、大きくため息をついた。

「で、その次が天龍、と」

「ええ、その二十七日後、移籍により横須賀から佐世保に移動中の天龍が砲撃を受け、護衛任務中の駆逐艦電、雷、響、暁とともに戦闘になっています。それ以降、徐々に深海棲艦との戦闘ペースが上昇していきます」

「まさにパンデミックだな」

と沼坂が冷笑する。

「なお、最初の戦闘から現在に至るまで、民間船舶が深海棲艦に襲撃された記録は一切ありません」

沼坂は二本目のタバコに火をつけ、天井に向けて白煙をくゆらせながら、

「どっからどう見たって、"そう" 考えるしかねえよなあ……」  
と独りごちる。

「深海棲艦は俺らに喧嘩を売ってたわけじゃねえ。……むしろふっかけてたのは、俺らの方なんだよ。あいつらはただ、反撃をしたらだけなんだ。それも一度やられたことのある相手だけにな。俺らに比べりゃ、ずいぶんと平和主義な連中だけ」

「それで……深海棲艦との戦闘をやめるよう横鎮長官に報告に？」

「夕張に言われ、沼坂は目を白黒させた。気付いているだけじゃない、その上でこちらのとつ

た行動まで読んでいる。そう思うと背筋が薄ら寒くさえ感じる。

「……どうしてそう思った？」

沼坂の質問も意に介せず、夕張は穏やかに微笑んでみせる。

「横須賀の人事部長なら、その後は防衛戦隊や根拠地隊の司令職を経て鎮守府ないし警備府の司令長官になるのが通常ルートです。丹那要港部は、司令には申し訳ありませんが左遷先と表現するほかありません。司令は『上司に喧嘩を売るのが趣味』ともおっしゃっていました、こちらにいらしたときから大体の予想はついていました」

そう淀みなく言つてのける夕張を、沼坂は虚を突かれたようにただただ見つめる。しかし、やがて堰を切ったように笑い出した。

「そういうお前も、上司に喧嘩を売るのが好きなようだな」

夕張は何も言わず、にっこりと微笑むのみ。大したじゃじゃ馬だが、うまく御せばとんでもない武器になる。

「お前とはうまくやっついていけそうだよ」

と沼坂が言い、

「お役に立てるよう、がんばりますね」

と夕張が歯を見せた。

「ところで、夕張の予想だが、完全に正解とは言えないな」

言いながらグラスに残ったビールを飲み干すと、すかさず夕張が瓶を手取る。沼坂は左手で制止しながら瓶だけ受け取り、手酌しながら言葉が続けた。

「なにせ、ただ戦闘をやめろって言ってもとうてい無理な話だ。それよりもっといい方法がある。分かるか？」

夕張は左の拳を口元にあて、しばらく目を左に向けて考え込むが、やがて無言のまま沼坂へと視線を戻す。沼坂は赤褐色のカブトをあたりながら答えた。

「深海棲艦との交戦歴のある艦娘、全員の退役だ」

夕張はぎよっとして声を漏らす。

「ずいぶん思い切った提案ですね……」

「そうすりゃ深海棲艦は攻撃する相手が一切いなくなるんだ。大人しくなるに決まってる。あとはこつちから手出ししなけりゃいいだけの話だ」

「でも、そんな提案を横鎮長官が認めるわけないでしょう」

夕張はそう言いながらシマアジのにぎりを箸でつかむ。沼坂は口角を上げながらグラスを口元に持ってきて、言った。

「それも計画のうちだとしたら？」

夕張はハツとした表情で沼坂を見る。

「……丹那に飛ばされることまで、計算ずくだったと？」

「いくら上官に喧嘩を売ったとはいえ、軍紀違反や物損のような懲戒事案にまではあたらなし、著しい能力不足ってわけでもない。おまけに俺は曲がりなりにも少将だ、あまり露骨な降格人事はできないだろ。横須賀の人事部長の後職として何とかあり得るラインのポストじゃないか。そうなるさつき夕張が言ったような部隊司令か……あるいは隷下機関の司令だ。そこにきて丹那要港部司令なんていうおあつらえ向きの職が空席になってんだ。長官殿としては、こいつを利用しない手はねえよな」

「……しかし、目的は？」

夕張が恐る恐る問いかけると、沼坂は齒をむき出しにして邪悪な笑みを浮かべる。

「さて、そこよ。俺は長官殿をして深海棲艦戦を終結せしめたい。だがそれに足るだけの権力が俺にはない。……どうすればいい？」

答えは見えていた。しかしそれを言ってしまったていいものか。夕張は逡巡し、沼坂の顔を見つめる。昼行灯かと思っていたがとんでもない。その正体は羅刹そのもの。

「……丹那要港部は皇都及び横須賀の至近に位置し、防御の面から見れば戦略上最も重要な拠点ですが、積極攻勢、浸透強襲ドクトリンが支配的な深海棲艦戦においては不当なまでに軽視され、防衛上の死角となっています」

やはり直接答えを言うのははばかられ、なんとか迂遠に処理しようとする。沼坂を信用していないわけではないが、それでも自分から言い出すのとは上官に言われるのではあまりに大

きな差があるのだ。夕張の心拍は早まり、顔や背中からは冷や汗が出てくる。沼坂はそんな夕張の様子に気付くと、表情からは先ほどまでの邪気がスッと抜け、

「悪い悪い、いじめるつもりはなかったんだ。夕張があまりに俺の考えを読み取ってくれるから、つい面白くなっちゃまってな」

と子供のようにつけたけた笑いながら、グラスをやおら飲み干した。

「そう、夕張の思ってるとおりだ。丹那要港部は横鎮からは完全にノーマークだ。俺はその死角を突き、横須賀鎮守府を——」

とんでもない人間がやってきたものだ。夕張は引きつった笑みを浮かべながらも、内心の昂揚をはつきりと感じ取っていた。沼坂の次の言葉を心待ちにしている自分がある。沼坂がにやりと笑うと、夕張にもその感情が伝播する。

「横須賀鎮守府を、襲撃する」

これから、ずいぶん面白くなりそうだ。

『終わりの花』無料サンプルは以上です。

書籍は pixiv BOOTH にて購入できます。

<https://minadzki.booth.pm/items/34504>